

「励ましに満ちた決定」使徒言行録15章22～33節

細井 茂徳

アンティオキア教会において、エルサレムから来た人たちによって引き起こされた異邦人キリスト者たちを「騒がせ動揺させた」(24節)問題を解決すべく開かれたエルサレム教会会議を学んでいます。前回において、協議の結果、「割礼は必要ではなく、主イエスを信じる信仰によってのみ救われる」、そのことが確認されました。今日の聖書箇所では、その決定事項を他の諸教会の人たちに伝える場面です。

22～29節には、会議で取り決められた決議をアンティオキアはじめ他教会へどのように通達するのか、そのことが記されています。手紙を送って通達すれば事足りるという考えでなく、バルナバとパウロと共に、エルサレム教会の代表を二人使節として派遣することにしました。教会の決定を伝えるために人が遣わされていくという非常に配慮に満ちた報告の仕方がなされ、そこに教会が一つであること、同じ主イエスの教会であることが示されています。それだけに、手紙の内容も「励ましに満ちた」ものでした。異邦人キリスト者たちが「**それを読み、励ましに満ちた言葉を知って喜んだ**」(31節)ほどであったのです。割礼を受け律法も守らなければならないのかと不安に怯えた心が慰められるような決議として、アンティオキア教会の人たちはこれを受けたのです。慰められただけでなく、彼らは力づけられたのでした。アンティオキアの「**きょうだいたち**」に伝えられたのは、単に論争に勝利したということではなく、干涸らびてしまった心が水を得るような豊かさであり、力尽きた足腰が奮い立たされるような力でした。

混乱と分裂に陥りそうになったアンティオキアの教会でしたが、新たな人々との交わりが与えられ、また新しい宣教者が増し加えられたのでした(34節—使徒言行録の巻末を参照)。元の平静を取り戻したというのではなく、新しく歩み出したのです。私たちにも神の恵みの内に、試練の後に尚も新しく出発をすることが出来る希望があります。